



## 「僕と、ゾンビと、心理学」

文学部心理学科3年  
山口力斗

「僕は一体何のために授業を受けているんだろうか」

大学二年生の初夏。講義を受けるのにも慣れ、サボり癖が付き始める頃。僕は退屈な日々を過ごしていた。高校生の頃にはあれほど憧れていた心理学の勉強が、いざ教室で先生の話の聞いているとなんとなく面白くない。ただ当たり前のことを難しく言い換えているだけのようないきなり、正直に言うなら僕は失望していたと思う。入学当初は新たな学問との出会いにワクワクしたものだが、いつのまにか、そういう瑞々しい気持ちも消えてしまっていた。

そんなある日。僕は出会った。偶然時間が空いていたから履修した授業でのことだった。先生が黒板に大きく眼球の断面図を書きながら、人間の視覚機能について説明していた。「これは余談ですが、本来この世界に色というものは存在しません。というの、色とか光とか、ほかに匂いや味、音というような主観的な経験は、すべて脳が作り出している幻であるためです」「それは当たり前のことだ」

僕はいつものように頭のなかでそう横槍を入れつつも、少し興味をそそられた。常日頃自分の目の前に存在していると疑わないものが、脳によって作られた幻想だとしたら、それはたしかに不思議なことかもしれない。一体どうして脳の活動から色や匂いなんてものが生まれるのだろうか。僕は気になってインターネットで検索してみた。それらしいキーワードが載っている記事をいくつか見つけたが、偉い学者さんが考案した理論の紹介にとどまっていた、明確な答えは見当たらなかった。

「そもそも心ってなんだろう？」

その疑問に出会ったときから、僕は心理学の勉強そっちのけで、そのことについてばかり考えるようになった。色、匂い、音、味にとどまらず、考えや感情、記憶、自己意識まで。それらを経験している今の、この僕自身はどのように作られているのだろう。「自分」というこの生々しい主観的な体験はどこからやってくるのだろう。脳みそだろうか？ 心臓だろうか？ はたまた魂だろうか？ それらの疑問の答えを知るためには、心理学ではなく哲学を勉強しなければならないようだった。答えが知りたくて、学者さんが書いた分厚い本を図書館で探し出し、「現象的意識」だとか「哲学的ゾンビ」だとかいう聞き慣れない専門用語と闘った。ある研究者は「自分」を説明するために一般的に「魂」と呼ばれるような神秘的な概念を持ち出し、また別の研究者はあくまで科学的に脳を研究することで問題は解明されると信じていた。いくつかの対立する専門家の主張をまとめてみて分かったことは、どうも彼らにもはっきりと答えが分かっているわけではないということだった。

そういった日々が数ヶ月は続き、ついに僕は一つの結論にたどり着いた。

「この問題は今の僕には答えられない」

それはある種の挫折だった。だけど悔しくはなくて、むしろ清々しい気持ちだった。こんなに真剣に一つの問題と向き合って、勉強したのは初めてだったのだ。

もちろん僕はあの問題への関心を失ったわけではない。ただ、今の僕が夢中になっているのは心理学である。あの問題と向き合ってから、今までつまらないとテキトーに済ましてきた心理学の勉強が、とても楽しくなった。当たり前のことを難しく説明するのはつまり、論理的かつ正確に現象を説明するために必要なことなのだと気づいた。些末だと思っていた一つ一つの知識の断片が、まるであの問題というパズルを埋めるピースであるかのように感じられるようになった。心理学を着実に学び、研究していけば、いつかあの難問に答えられるかもしれない。僕はかすかな希望を胸に、今日も心理学を学んでいる。

### ● 講 評 ●

あこがれていたはずの勉強なのに退屈に感じられてしまう経験、多くの人が持っていることでしょう（私は、あります）。そんな中、ふとしたことから問題を発見し、専門書を読み解いて真摯に考え、新たな視点を見いだしたことには尊敬の念をおぼえます。学問に取り組む者どうし、これからたくさん問題に出会い、勉強していきましょう！

### ● 講 評 ●

わたしたち教員は、まさにこのような瞬間のきらめきのために、日々、研鑽をつみ、教育の準備をしているともいえます。これだけでもこの教室の意義はあったのではないのでしょうか。他方でわたしたち教員が教室で発する言葉の一つ一つが大きな影響を及ぼすのだな、と身の引き締まる思いもする作品です。

九月の晴れた日。秋学期の一週目。何となく取った授業は「世界の中の日本語」。日本文学を英訳する授業だった。川端康成の『雪国』の回で、「夜の底が白くなった。」という文の意味が分からず、どうしても訳せなかった。教授が黒板に書いた答えは「The earth lay white under the night sky.」たくさんの人で埋め尽くされた教室で、私の目にはその情景がはつきりと浮かんだ。日本語を英訳してやっとなの意味が理解できたのは、これが初めて。世界の中の日本語と出会った瞬間だった。



国際文化学部国際文化学科4年  
福原知佳

## 「秋の日の黄昏」



## 「大学生的共生関係のすゝめ」

文学部日本文学科4年  
判治有香里

後から考えれば笑ってしまうくらい、声が震えた。でも、それが小心者で人見知りな当時の私の、精一杯の勇気だった。

「あ、あのっ……わ、私の教科書、見ますか？」

たどたどしい声が響き、聡明そうな円い瞳がきょとんと私を見つめる。それが、彼女との出会いだった。大学に入って一年目の、英語の講義のこと。普通だったら春から通って受ける科目だったが、彼女は留学

していた関係で秋からクラスに入ってきた。最初の自己紹介での流暢な英語には、思わず息が漏れたのを今でも覚えている。偶々私の隣の席に座った彼女だったが、春にいなかったため、教科書を買っていなかったらしい。困っている様子に、私は教科書を広げて申し出たのだった。

「さっきはありがとね、助かったよ。次お昼休みだし、良かったら一緒に学食行かない？」

私は対照的な、はつらつとした口調で彼女は笑みを浮かべた。あ、笑顔可愛い。話しやすそうなんだな。聡明そうな瞳の持ち主は実際とても頭が良く、話の引き出しの多さに私はすぐに引き込まれた。最初あんなに緊張していたのが嘘みたいだ。

結果から先に言うと、彼女と私の交流は続き、学年が上がってもよく連絡を取り合う仲になっていた。そこまでの友人になれたのは、色んなことに興味を持つ彼女のきらきらした瞳が眩しかったからなのだと思う。好奇心いっぱいの彼女の目から見た世界は、いったいどんなものなのだろう。

三年生の春、私は一緒に授業が受けたくて彼女に声をかけた。まったく専攻と違う分野の授業だったけれど、色々な分野に挑戦してみたいと思ったのだ。彼女は予想していた通り快諾してくれた。そして、講義内容も予想通り。キーストーン種。げのも編集……切断酵素？ 酵素って納豆とかに入ってるやつでしょ。それを切断って、ナニ？ 加えて、難易度の高い小テストの数々。……でも。

絶対、二人でAプラス取ろうね。畑違いの科目で一番上の成績なんて、無謀な目標だったかもしれないけれど、彼女とだったらそれすらも楽しめるような気がした。

「もう無理……やっぱり文系にはちょっと厳しい……」

ところが、学期末の持ち帰り式テストの難問を前に、私は机に突っ伏していた。一緒に考えていた彼女も苦笑いする。

「自分ら、両方ばりばりの文系だもんねえ」

「そうだよなえ。何、『作物の害虫を農薬で駆除するリスクを記述せよ』って。そんなの害虫やっつけてめでたしめでたしじゃないの？ 農家でもないのに、分からないよ」

お手上げ状態の私をよそに、彼女は講義で配られたレジュメに目を通していった。黒ボールペンの几帳面な字で、余白のところまでびっしり埋まっている。

「ここ見て。確か食物連鎖とかの単元で、似た話出てたよね」

「うーん、そうかも……あんまり覚えてない」

「ちょっと復習してみよっか。アブラムシは植物の液を吸う。で、テントウムシはそのアブラムシを食べる……アブラムシは作物をだめにする『害虫』で、それを食べるテントウムシは『益虫』、だっけ」

彼女の出した話で、講義で教授から聞いた内容を次第に思い出す。

「そうそう。だけど、アブラムシは甘い汁を出す代わりにアリに守ってもらって、天敵は攻撃が難しいんだよね」「共生関係だね。お互いお互いのメリットになる関係性」

「うん。アブラムシって、植物にびっしりついてると気持ち悪いよね。アリも守り切れにくいから沢山テントウムシを放しちゃえば、一網打尽にできたりしないのかなあ……あっ！」

自分で何気なく言った言葉をきっかけにして、止まっていた思考が目まぐるしく回りだす。もしかしたら、間違ってるかも。……でも、もしかしたら。

「そうだ、天敵だよ。害虫駆除するのって、農薬だけじゃなくて天敵を使う方法もあったよね？ でも、害虫を殺せるくらい強い農薬を使ったら、天敵まで死んじゃうんじゃない？」

私の思い付きに、今まで悩んでいた彼女も目を見開いた。

「あ、そっか！ 農薬で一時的に害虫の数が減っても、天敵も減るから、しばらくすると逆効果になって害虫が増えちゃうこともあるかもしれない」

そこから先は早かった。考えたことを言葉で整理して、興奮気味に書き込んで、気づけば真っ白だった解答用紙は、ぎっしり書き込まれた文章で黒くなっていった。

持ち帰りテストを提出してしばらく、いよいよ半期分の成績が開示される日、パソコンの画面を開きながら私は唾をのむ。彼女はきっと大丈夫だろう、あんなに勉強熱心なんだから。……でも、私の方が結果が伴わなくて、約束を守れなかったら。こわごとと、マウスをクリックしてページを開く。そして、受講した科目名と評価を表すアルファベットの羅列の中から、彼女と受けた科目の結果を探した。

「あっ、久しぶり！ 夏休みの初めくらいに会って以来だね」

長らく訪れていなかった校舎で、人懐っこい笑顔が目飛び込んでくる。長い休みの期間が明けて、久しぶりに会った彼女は少しだけ日焼けしたように見えた。

「会えなくてさみしかったよ。あ、そうそう。成績もう見た？」

「見たよー。生命科学、無事Aプラスとれた！ ……そっちは？」

窺うような表情で訊く彼女に、笑顔を返す。私の世界は学びあえる友人と出会って、ほんの少しずつだけ広がった。そしてこれからも、きっと。夏の輝くような日差しはもう終わっていたけれど、私の目の前の世界は今、きらきらと光っていた。

### ● 講 評 ●

「教室」での「出会い」が、その後の大学での生活を彩り豊かなものにしていったことが伝わる良い作品でした。タイトルどおりの共生関係がテンポ良く表現されていましたね。これからも、良い「出会い」を求めて、自ら行動してってください。



## 「世代交代」

国際文化学部国際文化学科3年  
土方日向

ふと教室をじっと見まわしてみる。

ここは55年館の511。

至る所に「跡」がある。

何か飲み物をこぼしたのだろう、シミがある。

鋭利なものでひっかいたのだろう、傷がある。

講義がつまらなかったのだろう、落書きがある。

どれもみな、法政の歴史を物語っている。

1955年に建てられた建物だ。何年も何年も上の先輩。

いつもいつもありがとうございます。

55年館の廊下を歩く。

そこには貼り紙が。「511、閉鎖」

この教室で受けた講義はたくさんある。

なぜ壊さなきゃいけないのだ。

たくさん傷ついたから？

とても悲しい気持ちになった。

いままで本当にお疲れ様でした。

富士見ゲートの新しい教室。

さすが、傷一つない。